



# まほろん通信

VOL.18

(平成 17 年 10 月 15 日発行)  
(財) 福島県文化振興事業団  
福島県文化財センター白河館  
〒961-0835  
白河市白坂字一里段 86  
TEL 0248-21-0700 (代)  
FAX 0248-21-1075  
URL <http://www.mahoron.fks.ed.jp>



## おでかけまほろん中間報告

「おでかけまほろん」は、開館した平成 13 年度 7 回だった回数も年間 17 回を数えるまでになりました。今年、年間を 3 期に区分して前期 7 ヲ所、中期 6 ヲ所、後期 4 ヲ所とし、9 月末までに、11 ヲ所で開催しました。

「おでかけまほろん」では、行く先の学校等がある地域から見つかった収蔵品を持参し、子供たちにさわってもらったり、火おこしや勾玉づくりなど、当館が日常行っている体験学習メニューを実施しています(写真は新地町駒ヶ嶺小学校の弓矢体験)。本年度は、一番人気のメニューは火おこし体験で、ご利用いただいたすべての学校で体験しています。火おこし体験では、火をおこすだけでなく、その火を使って、復元品の土器で味噌汁や煮物を作った学校もありました。

また、遠方の学校からは、「近場の学校 2 校位で組んで活動を行うのもよいのでは」とのご意見もいただきました。来年度の募集に反映させて、午前 1 校・午後 1 校の 2 つの学校で実施する方策も検討していきたいと思えます。

来年度は、3 ヲ所増やして 20 ヲ所にでかける予定です。特に前期は募集当日に予約が埋まってしまいますので、ご希望の学校・施設は、募集開始日をお見逃しなく！



## 体験学習

### 体験発掘ツアー

今年の発掘体験ツアーは、当事業団遺跡調査部の協力で、9月3日(土)に喜多方市高堂太遺跡<sup>たかどうた</sup>で行われました。今回の参加者には遠くからご参加くださった方も多く、埼玉県や東京都などからの参加者もいました。

高堂太遺跡は中世の武士の屋敷跡(館跡)と考えられる遺跡で、調査区周辺には今でも堀の跡とみられるくぼ地が続いています。到着後、担当職員から遺跡の概要について説明を受けた後、作業を行いました。今回の体験内容は主に、調査区内のどこに、どのような遺構があるのかを探る「遺構検出<sup>いこうけんしゅつ</sup>」という作業です。「草削り」と呼ばれる道具を使い、少しずつ平らに地面を削り込んでいきます。今回の活動では、参加者のみなさんの努力で、柱が東西5本×南北4本に並ぶと思われる掘立柱建物跡<sup>ほったてばしら</sup>を、1棟検出することができました。

今回の体験発掘では遺物がほとんど出土しませんが、「人の掘った穴とそうでないものをみきわめる」という、発掘調査の基本中の基本を体験したツアーとなりました。

活動の途中では、磐越西線に蒸気機関車が通るのが見えたりと、様々なハプニングが起きました。帰りのバスの中では、今後、高堂太遺跡の調査でどんな成果が得られるのかを楽しみにしているとの声も聞かれました。



<建物跡を検出中>

### 鉄づくりイベント案内

今年も粘土製の古式製鉄炉に風を送って、砂鉄から鉄をつくるイベントを行います。

**日時** 11月5日(土)

午前11時30分から開会式を行い、正午に火入れ、午後1時から送風を開始し、午後11時頃に送風を停止する予定です。

11月6日(日)

午前11時から炉を解体し、午後2時30分に閉会式を行います。

**募集** 踏みふいごを踏んでくださる方を募集します。詳細はまほろんまで



<土器の焼き上がりのようす>

### 土器の野焼き

8月21日(日)に土器の野焼きを行いました。今回の野焼きでは、実技講座「縄文土器づくり」で作った土器の他に、土製耳飾りも同時に焼くこととしました。

午前8時30分に予備焼きのため着火しました。この作業で土器焼き場の地面をしっかりと乾かし、土器を周りに並べて火に慣れさせます。最初は50点ほどだった土器も、持ち込みのものが徐々に加わって、最終的には大小とりまぜて100点近い数になりました。

当日の天候は曇りでしたが、この季節の野焼きではむしろ曇ってしてくれた方が涼しくてありがたいです。参加者のみなさんの第一声は必ず、「このまま曇ってしてくれたらベストですねー。」でした。

午前11時過ぎ、いよいよ本焼きとなりました。途中から風向きが安定したおかげで、炎の温度もおだやかに上昇していたようです。粘土が熱を受けて化学変化を起こす時には、今までのすすけた色から美しい赤茶色に変わる一瞬があり、幸運なことに今回は参加者全員がこの一瞬を目にすることができました。

午後1時にはほぼ火も落ち、取り出しも終了しました。結果として、粘土に空気が入っていたと思われる2点の土器が欠けてしまいましたが、焼け色も上々で、全体にはほぼ成功といえる野焼きでした。本年度中にはあと2回の野焼きが控えています。次は「目指せパーフェクト」です。



<平成15年に行われた前回の鉄づくり>

## 秋のてんじ案内

### ふくしまの重要文化財Ⅳ

—考古資料:古墳時代後期の金工品—

会期:平成17年10月1日(土)~12月4日(日)

会場:まほろん特別展示室

観覧料:無料

まほろんでは、10月1日(土)から、秋のてんじ「ふくしまの重要文化財Ⅳ」を開催しています。この展示会は県内の重要文化財を紹介するシリーズの第4弾で、今回は、高度な金工技術で製作された古墳時代後期(6・7世紀)の金属製品をご紹介します。これらは、古墳から出土した副葬品の数々で、県の重要文化財に指定されているものです。

浜通り地方では、山の斜面に横穴を掘り、そこに遺体を葬る「横穴墓」と呼ばれるお墓が数多く発見されています。いわき市にある中田横穴もこのようなお墓のひとつで、赤と白の顔料を使って、壁面に三角形の文様が彩色されていることで、全国的に有名な横穴墓で



<杏葉(中田横穴出土)>

す。出土した副葬品も、馬鈴や鞍金具などの馬具をはじめ、鉄製の武器・武具、装身具など、実に多彩です。まほろんでは、現在、馬具の復元品を製作するための調査・研究を行っていますが、今回は、その内容の一部についてもあわせてご紹介します。



<馬鈴(中田横穴出土)>

同市八幡横穴群では、総数7,000点以上の副葬品が出土しています。豊富な副葬品のなかで特筆されるものは、忍冬唐草文と呼ばれる文様を透かし彫りにした金銅製品です。この類例は法隆寺に伝えられており、いわき地域への仏教文化のひろがりのようなすを物語るものとして注目されています。

鹿島町には、前方後円墳と円墳が分布する真野古墳群という古墳群がありますが、このなかのひとつ、A地区20号墳(前方後円墳)からは、金銅製双魚佩と呼ばれる金銅製品が出土しています。この類例は、奈良県の藤ノ木古墳出土例など、全国でも数例が知られているにすぎません。

これらはいずれも、当時の金工技術がいかに優れていたかを物語るものです。秋のひとつき、いにしえのすばらしい技の世界をぜひご覧ください。

## シリーズ復元展示

### 鉄製品の仕上げその2

前回、平安時代の鑄鉄製品の表面処理についてお話し致しましたが、今回は、処理の最終工程である着色についてお話し致します。当時の方法がいかなるものであったのかは解明されていません。今回行った方法は、いずれも現在行われている鑄金での方法や、文献資料での記載を根拠に推測しました。実際に行った方法は、①漆を焼き付ける(漆焼き法) ②油を焼き付ける(油焼き法) ③ワラや炭などを燃やしてススを付け、蜜蝋などで磨いて仕上げる(仮称「炭焼き法」)の3つの方法です。

漆焼き法とは、赤く熱した鑄物製品の表面に生漆を塗る方法で、現在の鑄物師さんでも、鉄釜や鉄鍋の仕上げに使われています。過去に遡ってみますと、古墳時代の鉄製甲に黒漆を塗っている例や、正倉院文書に記載されている焼き付け漆の記事、正倉院の刀装具の鉄に黒漆が塗られているものなどがあり、平安時代にまとめられた延喜式のなかにも、大刀や楯を焼塗漆で仕上げた記載があります。『伝統的焼付漆技法の研究—文献に見る焼付漆及びその研究の歴史—』中里壽克 平成10年 保存科学第37号東京国立文



<表面処理を行った鑄鉄製品(獸脚付き容器)>

化財研究所)

次の油焼き法は、製品の表面に油を塗り、これを焼き切る方法です。これも、現在でも使用されている方法であり、大正時代の塗料を説明した文献には、「油焼きの法は(中略)、綿にて水油を幾回も塗り、別に新しき綿にてこれを拭いつつ、油を十分に焼切りて仕上げるのである。」と記載されています(『塗物術』岡山秀吉著 大正11年 大倉書店)。

最後の仮称炭焼き法は、『天工開物』(宋応星著 1673年刊 藪内清訳注 平凡社)の「八鑄造釜」の項の「もし不十分な箇所があれば、すぐに少量の鉄をその上にたらし、補修し、藁をぬらして上におさえると痕跡がなくなる。」という文章から推測しました。ワラが燃えるときに出るススが鑄込みの痕跡を消去するのであれば、逆に、ワラや炭を焼いてススを付け、それを蜜蝋で磨いて定着させる方法を考えたのです。この方法に

近いものは、鉄釜の仕上げにあり、明治初年頃鉄釜の内部を炭火で焼いて、仕上げる方法が考案されたと考えられています(『日本の伝統技術』小口八郎 槇書店 1975)。

さて、以上の3つの方法で表面処理した写真が左のものです。微かな各色の違いがわかるでしょうか。みなさんは、どれが古代の鑄鉄製品の仕上げだと思えますか？

## 研修課より

### 10～12月文化財研修のご案内

野原にはリンドウの花が咲き始め、秋茜が飛び交う季節となってまいりました。知識の秋にふさわしい研修を企画しております。

10月8日～9日は、福島県文化センターを研修場所として体験学習支援研修4「石包丁づくり」を行います。鹿島町檜原の上真野川において粘板岩を採取して、礫の打ち割りから剥片の調整、研磨と紐通し穴の穿孔に至るまでの作り方の指導方法を研修します。

10月15日～16日は、無形の文化財研修Ⅰを行います。15日は無形の文化財に関する文化財保護法改正点の講義、16日には福島県民俗学会のご協力を得て、民俗行事の保存と継承をめぐる今日的課題として県内各地の事例報告を行います。

11月19日～20日は、時代別研究研修「縄文時代前期の土器の研究」を行います。今回は、縄文時代前期前半の花積下層式から大木1式期の土器を主なテーマとして行います。

11月26日～27日は、昨年引き続き松本友之先生を講師に招き、土器復元研修を行います。今回も基礎



<考古学と関連科学「原始・古代の漆文化」の研修風景>  
的な技術から完成度の高い復元技術を研修します。

12月10日は、須賀川市文化センターにおいて入門考古学講座Ⅱ「福島県の宝物」を行います。今回は宮内庁正倉院事務所の西川明彦先生を講師に招き、須賀川市稲古館古墳出土の鉄刀について、正倉院伝世刀と比較し、その意義についてお話いただきます。

12月24日は、体験学習支援研修5「まいぎりづくり」を行います。火おこしの道具「まいぎり」づくりを通して文化財普及のリーダーを養成する研修です。

## 総務管理課より

### 人気の軍団兵士模型

まほろんでは県内の遺跡から出土した遺物や記録類、展示用の模型、研究復元で製作した復元品を収蔵しています。これらは、館内における展示等で活用するほか、館外の博物館などにも貸出しを行っています。

本年度上半期の遺物・模型の貸出し件数は10件に上りますが、その中の2件は、8～11世紀頃の陸奥国に置かれたといわれる白河軍団に属した兵士の模型です。まほろんには陸奥国府多賀城へ赴く旅姿の軍団兵士と戦地で活躍する弓を射る軍団兵士の2体の模型があります。4月19日から5月29日に東北歴史博物館で開催された「古代の旅～人とももの通るみち～」には2体とも貸出され、旅姿の軍団兵士は同展の図録の表紙を飾っています。その後、この旅姿の軍団兵士は7月23日から9月11日に栃木県立博物館で開催された「とちぎの歴史街道～みちの世界へ～」にも貸出され、先日、無事役目を終えて帰還(帰館)しました。なお、



もう一方の弓を射る軍団兵士は、12月23日から三重県四日市市立博物館で開催される「聖武東遊～大化の功臣と壬申の功臣のはざま～」に貸出される予定になっており、只今ウォーミングアップ中です。

## まほろんからのお知らせ

### 入館者 15万人達成

まほろんも7月15日に開館4周年を迎えました。9月4日には入館者数が15万人に到達し、15万人目の方には館長より記念品と花束が贈られました。今後ともまほろんをよろしくお願いたします。



### ご利用案内

- 開館時間** 9:30～17:00 (入館は16:30まで)  
**休館日** 月曜日 (月曜日が祝日・休日の場合は開館し、その翌日が休館)、国民の祝日の翌日 (土曜日・日曜日にあたる場合は開館)  
**入館料** 無料 (体験学習によっては、材料費が必要な場合もあります。)  
**その他** 団体(20名以上)でご利用の場合は、事前にご予約ください。